

日本的教養（１）～教養主義をめぐる～

田 中 文 憲*

Japanese Culture (1) : 'culturalism'

Fuminori TANAKA

要 旨

本稿では、大正時代に日本に入ってきた「教養」の概念がどのように受け入れられ、日本人と関わってきたか、「教養主義」を手掛りに検討した。その結果、江戸時代からあった「修養」の概念が、明治時代にはぐくまれ、やがてそれが大正時代に「教養」にとって代られたことがわかった。

古典の読書を通じて人格の陶冶を目指すというドイツ的教養の影響を受けた日本の「教養」は旧制高校生を中心に受け入れられ、彼らのエリート意識と不可分のものになっていった。この時代の「教養主義」を担ったのはケーベルの影響を受けた阿部次郎や和辻哲郎であった。

やがて、マルクス主義の台頭とともに「教養主義」は衰退するが、戦争が本格化し、軍部が台頭するにつれてマルクス主義が弾圧されると、もう一度復活する。これが、河合栄治郎に代表される。いわゆる昭和教養主義である。戦闘的自由主義者であった河合もやがて軍部の圧力によって大学を追放される。

戦後、ふたたび「教養主義」は復活する。というより、戦中戦後を通じて教養書は読まれていたのである。このため、軍国主義への反発と反省から、戦前にまさるとも劣らないほど「教養主義」が盛んになった。

「教養主義」が没落するのは、高度経済成長の後である。日本人が豊かになり、大学進学率が高まり、みんなが中流意識を持つようになると「教養」は敬遠され、即物的な楽しみが求められるようになった。

最終的に「教養主義」を崩壊させたのは、海外からの要求を受け入れ、バブルを発生させ、消費に走ったわれわれ日本人自身である。現在、教養は地に堕ちたままである。「教養」は復権されねばならない。それが時代の要請である。

【キーワード】 修養、ドイツ的教養、教養主義

はじめに

最近、「教養」を復権させるべきであるとの議論が盛んである。この背景には、バブル崩壊後の日本経済の低迷による日本を覆う閉塞感がある。特に経済大国第２位の地位を中国に譲ってから日本人はやや自信喪失気味である。しかも、経済力の相対的低下に伴って領土問題が前景化し

平成25年 9月18日受理 *教養部教授

てくるなど、日本の国際政治における地位の低下が取り沙汰され始めるにつれ、日本人の焦燥感が高まりつつある。これに追い打ちをかけたのが3・11の大災害であり、その復興作業が順調に行っていないこと、なかでも原発事故の後始末がうまく行かないことにわれわれも苛立ちを覚える。こうしたことから、日本人はなぜこうも劣化したのかと考えざるをえなくなってきた。

特に「教養」が問題になる切っ掛けは1995年のオウム真理教信者による地下鉄サリン事件で、これにかかわった多くの人物がいわゆる理系のしかも「エリート」と見做される人々であったことから、「日本の理系には教養が足りない」との声が高まった¹⁾。こうした声を一層拡大させたのが、立花隆の「知的亡国論」(文芸春秋 1997年9月号)である。この中で立花は、日本の将来のリーダーであるべき東大生の「教養」の劣化が著しいことを指摘し、教養教育の再構築を訴えている²⁾。こうした主張は、ナポレオンに敗れて意気阻喪したプロイセンを立て直すべく「ドイツ国民につぐ」によって教育改革の必要性を訴えたフィヒテに似ていなくもない。

このようなことが切っ掛けで、大学における「教養教育」の見直し論も盛んになった。その時必ずといってよいほど問題になるのが、1991年のいわゆる「大学設置基準の大綱化」である。たしかにこの発表を受けて、教養学部ないし教養部の解体が進んだことは間違いない。最近では教養部の実質的な再建や新たな設立が見られるようになってきた³⁾。

本稿では、紙幅の関係上日本において「教養」がどのように受け入れられてきたかについて検討する。そして、次稿で現在までの「教養教育」の問題点を指摘し、それらを踏まえた上で、「教養」の復権はどうあるべきかについて検討することにする。

日本における「教養」～教養主義～

1. 修養主義

筒井清忠は、「筆者が調査した限りでは、「教養」という言葉と理念を「修養」の中から自立させて最初に使った人は和辻哲郎であると考えられる。その作品は大正六年の『中央公論』四月号に掲載された「すべての芽を培え」である⁴⁾として、「これがいわゆる「一般教養」の意味です。数千年来人類が築いて来た多くの精神的な宝—芸術、哲学、宗教、歴史—によって、自らを教養する、そこに一切の芽の培養があります⁵⁾」以下を引用している。次に筒井は、上に述べた「教養」という言葉と理念はそれまで「修養」と言われていたと主張する。たとえば、清沢満之の雑誌『精神界』(明治34年創刊)や綱島梁川の「見神の実験」(明治37年)、西田天香の「一燈園」運動(明治38年設立)、蓮沼門三の「修養団」運動(明治39年設立)、田沢義鋪の青年団運動(明治43年開始)、野間清治の講談社(明治44年設立)などを通じて直接・間接に「修養」を目的とする思想や運動が展開されたという⁶⁾。この中でも特に目を引くのが、蓮沼の「修養団」が「目的」として「自己の修養につとめ、人格の向上をはること」、「信仰」として「人生の目的は人格の向上にあり」を掲げたことである。ここに登場する「修養」の概念は、後に出現する「教養」の概念とほぼ重なる⁷⁾。

この「修養によって人格の向上をはかるうとすること」を「修養主義」と呼ぶことにする。

筒井によれば、修養主義の考え方はすでに江戸時代に見られ、二宮尊徳の報徳社や石田梅岩の

石門心学の中に盛り込まれていたという⁸⁾。この考え方は明治期を通じて主として庶民の間に散在していたが、「修養主義」として国民の比較的広い層に社会意識として確立するのは明治30～40年代であった。この時期は明治国家の体制整備が進んで、明治初期の活力を生み出した立身出世主義が曲がり角にさしかかった時であった。明治30年代半ばからは高等学校の入学試験競争が激しくなり「受験地獄」が出現した。こうした状況から多くの落伍者も生み出された。こうした閉塞ないし停滞状況に加えて、日清・日露戦争の勝利により、維新以来の国家目標であった「富国強兵」もある程度達成されたと受けとめられたことから、一種のアノミー（社会的弛緩状態）が生じたのである。こうしたアノミー状態は特に青年層に「柔弱」「奢侈」「享乐的傾向」「官能耽溺」「頹廢」などの風潮を生み出した⁹⁾。

こうした状態を打破するため、新しい思想・宗教・社会運動が起きたが、これらの中心にあったのが「修養主義」であった。

この「修養主義」を国民の広い層に拡大、浸透させたのが、いわゆる修養書だったといわれている。特によく読まれたのが加藤咄堂の『修養論』（明治42年）であるが、その特徴は「修養の目的は人格を完成し、当世に処して有用の材たらしむにあり。（中略）人格の本質は自己が自己の意義を自覚し其の価値を認知するに存す」によく表現されているとおり、人格主義であった¹⁰⁾。

また、新渡戸稲造は「修養」を独特の意味で使ったことが知られている。新渡戸は一高生たちに「人格」の「修養」の大切さをつねに説いたが、一高生に対しては「近頃、高等な教育に志す者は、多くは医科や法科や工科のごとき、いわゆる金になる職業に就くべき学科を修め、文科のごとき売れ行き悪き学問を望まぬ傾向がある（中略）法科でも工科でも、医科でも徳義心涵養の助けにならぬ学問はないはずであるが、なかんずく文科は修養的価値が多い。（中略）専門学は職業学であるから、右のごときように学問が墮落するのは自然のことである。僕の望む点は、仕事、事業に志して、学問はその手段としてもらいたいのである。智をもって徳の方法としたい。すなわち、学に志す者はパンを得る職業以上に眼を注ぐを要する」¹¹⁾と述べている。この新渡戸の言葉は、「パンのための学問」を排し、人文主義的教育による「人格の陶冶」（Bildung）（＝教養）を主張したフンボルトの考えと一致する¹²⁾。つまり、新渡戸は一高校長に就任時（明治39年9月）まだ使われていなかった「教養」の意味で「修養」を使っているのである。

一方で新渡戸は、一般大衆向けに雑誌『実業之日本』に「修養」論を次々に書いた。たとえば「いったい修養といえば個人の人格の向上を旨とし、すなわち孟子のいわゆる心の大を養うが主眼であるは論をまたぬが、一方には養われたる精神が実行に現われ、すなわち身を修むるには重きを置くから、修養の工夫は实际的、かつ具体的である」¹³⁾と説くとともに「職業の選択」「決心の継続」「勇気の修養」「克己の工夫」「名誉に対する心がけ」「貯蓄」「余が実験せる読書法」「逆境にある時の心得」「順境にある時の心得」「世渡りの標準」などの形でやさしく分かりやすく修養の方法を説いている¹⁴⁾。新渡戸の中で一高生向け「教養主義」と山深き寒村の少女向け「修養主義」が同居していたといえる¹⁵⁾。この意味で新渡戸稲造こそ「修養」と「教養」の橋渡しをした人物と考えて良からう¹⁶⁾。

2. 大正教養主義

「教養」という言葉が生れる前に、その概念はすでに日本に入っていた。加藤咄堂は明治42年に出した『修養論』の中で、「修養の語義多端、之を用うる人々一ならず（中略）独語之をビルツング（Bildung）といい作為構造の義なりと、人物を作為し品性を模造するの義と解すべきか」¹⁷⁾と述べている。日本で最初に「教養」という言葉を使ったのは和辻哲郎であることはすでに述べたが、和辻が行ったのは、ドイツ語のBildung（ビルツング）に「教養」の語を当てただけということになる。そうすると和辻が「一芸術、哲学、宗教、歴史—によって、自らを教養する」と現在では使われない言葉遣いをしているのも、「自らを教養する」がsich bildenの訳だとすれば合点がいく。

教養主義が「文化の幅広い享受を通しての人格の完成を目指す思想・生活態度（ハビタス）」¹⁸⁾もしくは「哲学・歴史・文学など人文学の読書を中心にした人格の完成を目指す態度」¹⁹⁾だとすれば、この教養主義文化の伝達者となったのは、三木清のいう「主として漱石門下の人々でケーベル博士の影響を受けた人々」²⁰⁾ということになる。具体的には阿部次郎、和辻哲郎、西田幾多郎、倉田百三などを指す²¹⁾。

ケーベル（Raphael Koeber）は熱心なドイツ的「教養」理念の信奉者であった²²⁾。それは、「ギリシャ哲学はあらゆる哲学的教養の基礎であり、またその知識なくしては近世哲学のみならず近代文化もまた理解しえざるが故に、ギリシャ哲学史の講義は毎年開かるべきはずである」²³⁾や「人文主義的教養（humanistische Bildung）は、学生のために、将来における自由にして独立なる学術的活動に到る路を開拓するところの、かつ日本人をして恐らくはまた精神的にも我らに比肩するに至らしむところの唯一の手段である」²⁴⁾などの言葉によく表れている。西田幾多郎も「先生が我国に來られた頃、痛く我国の学風の輕佻浮薄なるを嫌って居られた様に思う。或時私が先生を訪問してアウグスチンの著書の現代語に訳せられたものがないかと尋ねたら、先生は佛蘭西語に訳せられたのがある。併しなぜお前は羅匈語を勉強せないと云われた。私は日本の学生が希臘や羅匈の語を学ぶことの困難を答えたら、古典語を知らずして西洋哲学を理解しようとする考の輕佻なることを説かれ、お前の同級の某君は希臘語を読むではないか、You must read Latin at least. と云われた。又或時私が生意気にもヘーゲルの哲学について反駁がましいことを云ったら、Warum? Warum? と云って攻めつけられた。そして屢 non multa sed multum（広かねど深く）²⁵⁾と云って戒められた。此等の語はいずれも私の為に云われたものではあるが、当時の日本の学生一般に対して有って居られた先生の考と思う」²⁶⁾と述べて当時のケーベルの教養を回想している。三木清も「西田先生の思想の如きも、先生がギリシア哲学に深く入られるようになってから著しい発展があったように思う」²⁷⁾と述べている。さらに夏目漱石も「文科大学へ行って、ここで一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の学生が九十人までは、数ある日本の教授の名を口にする前に、まずフォン・ケーベルと答えるだろう。かほどに多くの学生から尊敬される先生は、日本の学生に対して終始かわらざる興味を抱いて、十八年の長い間哲学の講義を続けている」²⁸⁾と述べており、ケーベルの影響の大きさがわかる。このように見てくると、当時広まった「教養」が「ドイツの教養」つまりBildungであったことがわかる。

なお、この時期の教養主義は大正教養主義と呼ばれるが、それは大正期に教養主義を代表する

書物が次々と刊行されたからである。たとえば、阿部次郎「三太郎の日記」（大正３年）、倉田百三「出家とその弟子」（大正６年）、西田幾多郎「自覚に於ける直観と反省」（大正６年）、和辻哲郎「古寺巡礼」（大正８年）、倉田百三「愛と認識との出発」（大正10年）などである²⁹⁾。

ここで、教養主義に対する批判について検討しておきたい。

まず第二次世界大戦後の早い時期にこの問題を論じた唐木順三をとり上げたい。唐木は『現代史への試み』の中で、「鷗外には修養があった」し「特有な型があった」³⁰⁾、「明治維新前後に生れ、幼時に四書五經の素統をうけたジェネレーション」は「どこかに四書五經的な骨格をもっていた」し「儒教的な、卑屈を凡そ嫌う高潔なものをもっていた」さらに「経世済民と修業への意志が根本にあった。その上で西洋を学んだ」³¹⁾。ところが「明治二十年前後に生れ、明治末期から大正初期に社会的に活動を始めたジェネレーション」つまり「教養派」には「則るべき經典はない」なぜなら、彼らの「幼時或は少年時にその柔軟な骨格を型に形成する規範が無くなっていた」³²⁾からである。その結果、「大正期の教養派」は「一つの理想、一つの古典を選ぶということをせずに、古典と通称されているさまざまな花から、さまざまな蜜をあつめることが教養」だと思い込んだ。彼らには「エピゴーネントウムという言葉がまことによく適う風姿であった。それは特定の主義主張のエピゴーネンではない。すべてのもののエピゴーネンであった」³³⁾と批判する。特に旧制高校生のアイドル的存在であった阿部次郎については、「すべてすぐれた書物は經典であるという『三太郎の日記』の立場では、經典の意味は失われるであろう」と批判する。唐木はさらに「修養の生きていた時代には、外来的なものとの対決、総合には葛藤があった。教養の段階、殊に客観的教養にいたると、葛藤のない享受になる」という。したがって、三太郎的な「あれもこれも」の立場をとり続けるなら「外来的なものの読書力、紹介力、翻訳力が教養になり、更にまた翻訳された文庫本を多く読むことが教養であるということにもなっていく」³⁴⁾と主張する。三浦雅士の言葉を借りれば、「唐木順三は、修養を旨とした明治を称揚し、教養を旨とした大正を貶めている。いや、ほとんど罵倒している」³⁵⁾といえるし、「ほとんど感情的なまでの反発へと傾いて」³⁶⁾いる。

はたして唐木の「教養」批判は的を射ているのだろうか。

これに対して、たとえば筒井清忠は、唐木は「明治の「修養」には「経世済民と修業への意志が根本にあった」のに対し、大正の「教養」に至ると「骨格を型に形成する規範が無くなっていた」という言葉を取り上げ、「唐木の議論をあらためて整理すれば、明治の修養主義から大正の教養主義へという類型的な変動図式が考えられているということになる。（中略）しかし、「修養」という言葉の実際の使われ方、社会意識としての「修養」という観念が登場し広く広まった時期、これらを事実即してミクロに検討してみた時、唐木の図式はミス・リーディングなものであったといわざるをえないと思う。唐木は明治から大正にかけての言論活動を広い層にわたって点検する作業を行わなかったのではないだろうか」³⁷⁾と結論づけている。

また、小室弘毅は「『三太郎の日記』における阿部の考える教養のあり方と、唐木のいう本来の教養のあり方とは別のものではなかった。唐木が批判したのは、実は大正期教養派ではなく、その後に変質した「教養書主義」であった。唐木の教養派理解は「教養書主義」的な読み傾斜しており、それと教養派とを同一視することで教養派を批判したという印象を拭き切れない。つ

まり唐木は、自らが批判したものの「期待の地平」の読みに立って『三太郎の日記』を批判し、教養派を批判してしまったと言える。そこに、唐木の教養派批判の限界があったと考えられるのである³⁸⁾としている。

清川大も「近年では、「修養」と「教養」の相違よりも、むしろ同等性を明らかにすることに研究の主眼がおかれている³⁹⁾」として暗に阿部次郎を擁護している。

竹内洋も筒井の「教養主義は「修養主義」が内包していた人格主義をオリジンにしている」という知見に賛意を表し、大正教養主義のイデオログである阿部次郎の『三太郎の日記』にも「いかにして新聞雑誌を読むべきか（中略）同時に更に有意義なる生活と修養とに費やすべき時間が非常なる蚕食を受ける⁴⁰⁾」や「すべてのものと共に生きてしかも自ら徹底して生きること—自分は自ら修養することによってSowohl-als auchのこの途を進んで行くことができることを信じている⁴¹⁾」というように「修養」という言葉を使っていることを指摘し、筒井と同じ立場を表明する。⁴²⁾

このように唐木に対する再批判を見てきたが、まだ腑に落ちない点が残る。それは唐木の「教養主義者」に対する激しい攻撃である。唐木は西田幾多郎を評価する。では西田幾多郎は「教養主義者」ではないのか。ないとするとほかの「教養主義者」とどこが違うのか。その違いを唐木は西田の「悪戦苦闘」に見ているようである。唐木は「それらは東洋と西洋、日本と外国との間の如何ともしがたき相違、或は日本の後進性に由来する封建遺制と西洋近代との間隙を統一総合しようとする苦悩のあらわれであった。彼等には苦悩を真に苦悩たらしめ、矛盾を真に矛盾たらしめ、その内心に於ける相剋から創造へ転じ出るエネルギーの基礎をなす形、型、人格、性格があった」と主張する。これではまるで西田には儒教や仏教によって形作られた「型」があり、その上で西洋のものを取り入れようとして悪戦苦闘したが、阿部次郎や和辻哲郎にはそのような「型」はなく何のためらいや躊躇もなく、ただ「あれもこれも」と西洋のものを取り入れただけだと言わんばかりである。この唐木の見方が一方的であることは阿部、和辻それに西田の著作を少し読めばすぐに確認できることである。たとえば阿部は『三太郎の日記』に「余は日本人である。余は日本人の血を受けて生まれ、日本の歴史によって育まれ、日本の社会の中に生息している。（中略）そうして夢殿の秘仏や三月堂の諸仏や法隆寺金堂の壁画や法華寺の弥陀三尊図等に言いがたき親愛と畏敬とを感じずる点においても、余は特に日本的なる素質—少なくとも特に東洋的な素質を持っているに違いない⁴³⁾」と述べており、阿部は自分の人格を形作っているものが日本的ないし東洋的なものであることをしっかり認識していることがわかる。一方、和辻は大正2年に『ニイチェ研究』でデビューすると大正4年には『ゼエレン・キエルケゴール』を出版するなど、コスモポリタンを自任し、世界文化の吸収による日本文化の改造を唱えていたが⁴⁴⁾、やがて日本文化の伝統に関心を移し、『古寺巡礼』（大正8年）『日本古代文化』（大正9年）『日本精神史研究』（大正15年）を発表するとともに、東洋文化を扱った『原始仏教の実践哲学』（昭和2年）『孔子』（昭和13年）を上梓している。加藤周一の言葉を借りれば、和辻は西洋ことにドイツで洗練された芸術作品の形態学、文献学、美学、あるいは哲学の方法と概念的枠組を駆使して日本の文化現象を分析したのである⁴⁵⁾。また、大正13年に京都大学への招聘に関して波多野精一に送った手紙で「私は生涯の間に、自分の力で幾分かでも学問に寄与し得るだろうと思えるのは、日本及び東洋のKulturの研究だと、今では思っております⁴⁶⁾」と述べていることがわかっている。

さらに昭和２年２月から翌年７月にかけてのヨーロッパ留学は、和辻に自らがどうしようもなく日本人であるという自覚をもたらしている⁴⁷⁾。このように見てくると和辻に儒教や仏教に基づく「型」があったことは明らかであろう。この点については、三木清も、「たしかに、今日のインテリゲンチヤにとって教養のおもな源泉となっているのは西洋文化であるということが出来るであろう。けれどもそのことは先ず、我々の血肉の中に日本の伝統的なものが存在しないということにはならない。むしろ実際は、頭脳においては西洋的になりながら、血肉の中には日本的なもの、しかも封建的日本的なものが、もしこういっても差支ないなら、あまりに多いのに苦しんでいる場合が少くないのである」⁴⁸⁾と述べている。

西田幾多郎が偉大なのは、高橋里美が『善の研究』を評して「邦人の手になった独立な哲学書らしい哲学書」「明治以後邦人のものした最初の、又唯一の哲学書」⁴⁹⁾と述べているように、その独創性である。それは何も悪戦苦闘したからでもないし、熱心に只管打坐したからでもない。それらは偶然の結びつきにすぎない。西田哲学が生れたのは、西田の天才によるものであって⁵⁰⁾、彼が儒教や仏教に基づく「型」を持っていたからではない。これは想像であるが、西田がドイツやフランスに生れていても恐らく一流の哲学者になっていたのではなかろうか。

ところで、唐木があればどこだった「修養派」すなわち「素読世代」が持っていたとされる「型」は本当に存在するのかという疑問が残る。考えてみれば、素読のもとになる四書五経にしても仏教の教典にしてもすべて中国など外国から入って来たものであり、昔の日本人はそれを受け入れ、それ以前に存在した思想や文化と混合したり、接木したりしたのである。日本人は太古の昔からこれをやってきたのである。その結果できたものは、加藤周一のいう「雑種文化」⁵¹⁾であったはずである。そうであるなら明治から大正にかけて、西洋文化特にドイツ的教養に対して、ある者は格闘し、ある者は葛藤を覚えながらこれを受け入れ、「新たな雑種文化」を作り上げたのではないか。この観点から見れば、西田の一連の仕事も、和辻の日本や東洋に関する仕事も、さらに九鬼周造の『「いき」の構造』なども、「新たな雑種文化」の精華といえよう⁵²⁾。

このように考えれば、唐木の「修養派」を賞讃し、「教養派」を貶める態度は、的はずれであったといわざるをえない。

次にもう一つの「教養主義」批判を検討しておきたい。それは、三木清によるものである。三木清は「一般に我が国において最も欠けているのは政治的教養であると言ひ得るであろう」⁵³⁾なぜなら「あの第一次世界戦争という大事件に会いながら、私たちは政治に対しても全く無関心であった。或いは無関心であることができた。やがて私どもを支配したのは却ってあの「教養」という思想である。そしてそれは政治というものを軽蔑して文化を重んじるという、反政治的乃至非政治的傾向をもっていた。それは文化主義的な考え方のものであった。あの「教養」という思想は文学的・哲学的であった。それは文学や哲学を特別に重んじ、科学とか技術とかいうものは「文化」には属しないで「文明」に属するものと見られて軽んじられた」⁵⁴⁾からだという。三木はさらに「教養は単なる知識の問題ではない。ドイツのヒューマニズムがすでに力説したように、ビルドゥングは同時に人間形成の意味をもたなければならぬ。しかるに人間はただ社会の中においてのみ形成される。ビルドゥングは人間形成という根本的な意味において、単なる趣味や博識

であり得ないことはもちろん、一般に単なる観想であり得ず、行為的でなければならない」⁵⁵⁾ といい、さらに「教養階級にとっていわば最も常識的であるべき教養は政治的教養でなければならない」⁵⁶⁾ と主張する。

大正時代後半から昭和にかけて、高等学校や大学が増加し、高等教育を受ける学生数が急増した。こうした旧制高校生や大学生が盛んに哲学書や芸術書などのいわゆる「教養書」を読むようになった。ところが、彼らの多くは個人の精神生活の内に閉じこもって「教養」を蓄えるだけで、社会における実践に活かされていないという主張がされるようになってきたが、その中で「政治的教養」の必要性を一番声高に論じたのが三木清である⁵⁷⁾。原宏之は「三木がいわゆる大正教養主義から逸脱しているのは、その鋭利な政治感覚による」として、三木を「真の教養主義者」と持ち上げている⁵⁸⁾。

では、三木のいう「政治的教養」について検討してみよう。三木は「人間は社会的動物であると云われているが、それはもと人間は政治的動物であるという意味である。人間はその本質的規定において政治的動物であり、彼等の日常生活がすべて政治的意味をもっている」⁵⁹⁾ と述べている。三木は、それだからこそわれわれは政治的に考え、政治的に行動すべきだと言いたいのであろう。しかし、ここに三木の大きな誤解があると思う。先に引用した「人間は政治的動物であり云々」は、古代ギリシャのポリスにおいていわれたことである。ところが、周知のとおり古代ギリシャのポリスで政治に参加できたのは奴隷以外のcivis（キウイス）つまり市民のみであった。しかも政治に携わる人間には一定の条件があると考えられていた。これに関しては、プラトンの「国家」第7巻に有名な記述がある。プラトンいわく「17、8歳までの少年期に数学的諸学科を、強制的にではなく自由に学習する。そして20歳までに2～3年の強制的体育訓練が課される。つぎに20歳～30歳の間にそれぞればらばらに学習してきた諸学を総合的に見ることができると視点を身につけさせる。ついで30歳～35歳の間に選ばれた者たちのみが、哲学的問答法の学習と研究を許される。そして50歳までの15年間は公務について経験をつむ。最後に、50歳以降は、少数の最優秀者たちが交替で哲学研究と政治に携わる」⁶⁰⁾ べきである。このように、古代ギリシャでは、政治に携わる者は、まず若い時にしっかり教養（パイデア）を身につけ、体を鍛え、社会経験を積むことが想定されていた。したがって年端も行かぬ学生たちが、「政治的教養」を身につけ「政治的行動」に出るなどといったことはまったく想定されていない。むしろそういうことに危うさを感じとっていたのではないかと思わせる。

三木のいう「政治的教養」とは具体的には何を意味するのだろうか。三木は「教養の問題は必然的にヒューマンイズムの根本問題に関係してくる。現代ヒューマンイズムはいうまでもなく社会的歴史的立場に立たねばならぬ。近來わが国でも社会哲学的研究の勃興の兆があるのは、ともかく喜ばしい現象である。それらの社会哲学的企ての一層多く「下からの哲学」として成立することが望まれるであろう。しかも社会そのものは歴史的に把握されることが大切である。ルネサンスのヒューマンイズムの根本概念が「自然」であったとすれば、現代ヒューマンイズムのそれは「歴史」でなければならぬ。歴史の弁証法について大いなるヴィジョンを有する哲学が、アウグスティヌスの「神の国」に比し得る現代の歴史哲学が待望されているのである」⁶¹⁾ と述べる。これは明らかにヘーゲル左派ないしマルクス主義的立場からの主張である。それもそのはずで、すでに三木

は三高の講師として京都にいたとき、西田幾多郎の推薦で河上肇のためにヘーゲル弁証法の研究を指導し、京大の経済学批判会に関係するかたわら、福本和夫の台頭に刺激されて、みずからも唯物史観研究を開始していたのである。昭和２年には『人間学のマルクスの形態』『マルクス主義と唯物論』、さらに『プラグマティズムとマルキシズムの哲学』を矢継ぎ早に「思想」誌上に発表し、新興のマルクス主義者として彗星のごとく論壇に登場していたのである⁶²⁾。福本イズムは「哲学者たちは世界をさまざまに解釈してきただけである」というマルクスの「フォイエールバッハに関するテーゼ」にみられる著名な言葉をふりかざすことによって、マルクス主義を社会主義の哲学として、つまり世界変革をめざす一個の哲学的な世界観として解明し、アカデミズムと対決しようとするものであった⁶³⁾。宮川透は三木は「哲学・思想問題の領域においては、マルクス主義を世界変革の一個の哲学的世界観として解明した福本イズムの志向を継承しながら、しかもそれを大正期以来のヒューマンイズムの土壌へと摂取し、そこからそれを再編成しよう」⁶⁴⁾としたと評している。このように見てくると、三木の「政治的教養」とはファシズムに傾斜していく日本でヒューマンイズムを守るために必要なものとして三木が提出したものだと考えられる。それは原宏之が指摘するように「1930年代の国体のなかの全体主義国家臣民たちをいかに市民に叩き上げるか」⁶⁵⁾の試みであったといえる。

これらのことから三木のいう「政治的教養」の「政治的」とはファシズムに対抗するために世界変革を目指すマルクス主義を受け入れ⁶⁶⁾、しかも変革を目指して行動することと理解できる。

三木が「政治的教養」を持つことによってファシズムに対抗しようとしたことに対しては評価できるが、一方でボルシェビズムの危険性にほとんど無警戒であったことは、時代の風潮があったとはいえ、やはり三木の限界を示しているといえよう。リオタール（Jean-François Lyotard）のいう「大きな物語」の終焉を経験してしまったわれわれがこれをいうのは後出しジャンケンのように気が引けるが、やはりボルシェビズムに対して楽観的すぎたといわざるをえない。

ちなみに、ファシズムとボルシェビズムの危険性を見抜いた代表的人物として、オルテガ・イ・ガセット（Ortega y Gasset）がいる。オルテガは、プラトン流に言えば本来政治に携わるべきではない人々（オルテガはこうした人々を「大衆」⁶⁷⁾（las masas）と呼ぶ）が模範的なエリート層に反逆し、これを踏みにじり、自ら国家権力を奪取することを危険視したが、この危険の兆候をファシズムとボルシェビズムの中に見たのである⁶⁸⁾。けだし慧眼というべきであろう。

3. マルクス主義

「教養主義」は大正後期になると徐々に退潮に転じてくる。その最大の原因はマルクス主義の台頭である。この頃の様子を表わすエピソードがある。それは大正12年に岩波書店の岩波茂雄が新しい叢書を刊行しようとして、それに「教養叢書」名を付けようとしたところ、「店の花形であった若い店員」小林勇から「教養」という言葉は既に黴臭くなって今日の人心を牽引する力がない」と言われ、「教養」がそれほど軽視されるようになっていることを発見して、驚いたというのである⁶⁹⁾。

マルクス主義や社会主義が日本に紹介されたのは明治時代であり、在野の社会主義者片山潜や幸徳秋水らによる「社会主義研究会」の創立（明治24年）やジャーナリスト横山源之助の「日本

の下層社会」の刊行（明治32年）などを嚆矢とする⁷⁰⁾。ところが高校生や大学生の思想にはなかなかえなかった。それは大正時代半ばまでの社会主義者やマルクス主義者は、しばしば「ごろつき」や「無頼漢」の代名詞だったし、せいぜいが、「労働者あがり」の教養や社会運動とみなされがちだったからである⁷¹⁾。

マルクス主義や社会主義がいわゆる「インテリ」⁷²⁾層に広がる切っ掛けとなるのが、大正7年末に東京帝国大学で結成された「新人会」である。これは、ロシア革命（1917年）と米騒動（1918年）の衝撃を受けて、東京帝国大学法学部有志を中心に「人類解放」と「現代日本の合理的改造運動」を綱領にして設立されたものである。さらに翌年（大正8年）いわゆる「森戸事件」が起きた。当時東京帝国大学経済学部助教授森戸辰男が『経済学研究』第一巻第一号に「クロボトキンの社会思想の研究」を発表したところ、当局は「朝憲を紊乱」し「国体に反する」として、この雑誌を回収し、執筆者森戸辰男を禁錮3カ月、罰金70円の刑に処した。これによって森戸は翌年1月に休職となり、その後復職することはできなかった。この事件は帝国大学教授の「赤化」として当時の新聞や雑誌に大きく報道された。しかし、報道されればされるほどクロボトキンの原書の注文は増えたといわれている。このようにしてマルクス主義は広がっていった⁷³⁾が、帝大生（それも東京帝大）が社会主義運動を始めたことや帝大助教授が社会主義についての論文を発表したことはマルクス主義および社会主義の威信を一挙に高めることになったのである⁷⁴⁾。

筒井清忠は日本の高校生や大学生にマルクス主義が広がった原因は、背後に「教養主義」があったからだという。「教養主義」の特徴の一つが「西欧古典崇拜」であったことから、マルクス主義が、イギリスの古典経済学、ドイツの古典哲学、フランスの社会主義を総合したものだと説かれると、「教養主義」からマルクス主義へスムーズに流れたというのである⁷⁵⁾。筒井はさらに、このような「古典崇拜的傾向」が日本のマルクス主義を極めて強い文献学的傾向へと導いたと指摘する。この結果、日本のマルクス主義の「訓詁学的傾向」が生じたと同時に、緻密なマルクス・エンゲルス研究が展開され、世界的水準のマルクス学が生み出されたという。また、「教養主義」とマルクス主義は、対抗しつつも相補的な関係にあったと主張する。さらに重要な論点として、「教養主義」が日本の学歴エリートに固有の身分文化になりかけていたのが、マルクス主義のもつナロードニキ主義的傾向によって阻止されたというのである⁷⁶⁾。

竹内洋はさらに、「大正時代の終わりには、もっとも頭のよい学生は「社会科学」つまりマルクス主義を、次の連中が「哲学宗教」を研究し、三番目のものが「文学」にはしり、最下位に属するものが「反動学生」といわれた」と述べる。したがって「マルクス主義は、教養主義にコミットした高校生に受容されやすかった。受容されやすかったというよりも、マルクス主義は教養主義の上級バージョンとみられさえした」⁷⁷⁾という。さらに「教養主義の根っこにある人格主義も左傾化と連続している。左傾化した学生がいみきらった学生は、「酒を呑む事、遊ぶ事をもって万事終り」となす」享楽型や「只学校の与ふるものを其儘蓄音機的に記憶する」体制同調型や実利型の学生である。こうした左傾学生の志向は、真面目や勤勉、禁欲などの点で人格主義との連続がみられるが、マルクス主義はそうした個人の内面倫理としての人格主義だけでなく、それをこえる社会の改革や民衆の救済という正義や殉教の倫理と美学をもたらしした。だから教養主義の内面化の強い者ほど左傾化した」⁷⁸⁾し、「マルクス主義は教養主義を蔑む理論的砦ともなったか

ら教養主義の鬼子でもあった。しかし、その場合でも、反目的共依存関係にあった」⁷⁹⁾と結論づける。

一方、マルクス主義および社会主義に対する弾圧が開始され、徐々に厳しさを増していく。まず明治33年（1900年）に労働運動の取締りを目的に治安警察法が制定され、1900年の大逆事件を受けて、特別高等警察（特高）が設置されるようになった。これらをより強化する目的で大正14年（1925年）治安維持法が制定されると、左傾学生への弾圧が一挙に強化された。1925年9月まず京都学生社会科学連合会に対して、京都府警特高課は会員や教職員の自宅や下宿先を家宅捜査するなどして弾圧を開始し、全国的な会員の検挙が行われた⁸⁰⁾。同年、一高と三高で「社研」が禁止されたのをはじめ、昭和3年には、二高、五高、六高、七高、松本高、富山高などで「社研」学生の処分が行われている⁸¹⁾。

マルクス主義への弾圧は、小林多喜二が拷問死した昭和8年（1933年）頃からますます激しくなり、昭和11年（1936年）に思想犯保護観察法が成立する頃にはマルクス主義関係の書籍の発禁や自主的絶版の時代となった⁸²⁾。こうした流れの中でマルクス主義はその影響力をはっきり後退させていったのである。

竹内は、マルクス主義の後退は高校生側にも原因があったとして、作家杉森久英の高校時代（昭和3～6年、四高）のエピソードを紹介している。それによると、当時、生徒の間では資本主義の没落とプロレタリアの勝利は常識となっており、これに疑問を持ったり、異議をさしはさめば、毒々しい嘲笑と軽蔑をもって一蹴されたため、仲間はずれになるのがいやで、マルクス主義の研究をしたというのである⁸³⁾。これが本当なら、弾圧が始まった時、一部の強固な「主義者」は別にして、一般の左傾生徒・学生が案外容易に崩れていったのもうなずける。

4. 昭和教養主義

昭和の時代に入って、軍部による大陸への進出とともに、ファシズムが勢力を増し、マルクス主義は息の根を止められた。しかも、学生はいつ軍隊にとられて戦線に送られるか分からないという一種の混迷状態にあった。これに応えるべくして出てきたのが「昭和教養主義」であった⁸⁴⁾。この当時の状況を河合栄治郎の『学生に与う』の中の河合の言葉が良く伝えている。河合は「学生諸君、我々の祖国日本は今、非常な難局に立っている。此の難局がいかなるものものなるかは、諸君が新聞雑誌を瞥見してさえ、感知することが出来るであろう。誠に我が歴史あって以来の未曾有の難局である。此の非常時局に際会した諸君は、いかに祖国に仕えるかに就いて、夙に覚悟を持って居られることと思う。若し祖国の危急が諸君を呼ぶならば、諸君は勇んで戦線に銃を執らねばならない。私はまだ戦争の起こらない以前にも屢々、一旦緩急あらば、我々は財を捨て命を抛たねばならないと書いたことがある。だが若し祖国が諸君に書物とペンを抛つことを命じないとしたならば、諸君はいかに日常の生活を送るべきであろうか」⁸⁵⁾と記している。

「昭和教養主義」とは「教養主義」の復権である。筒井は「河合栄治郎がこれに果たした役割は大きい。彼は教養主義をいわばマニュアル化して、旧制高校生程度の学力があれば誰もが同じ手順を踏むことによってこの道に進めるようなルートを作りあげたし、またこのルートを歩んでいないものは低く扱われるようなムードをも作りあげたのである」⁸⁶⁾という。また竹内は「阿部

次郎が大正教養主義のイデオログだとすると、河合は昭和教養主義のイデオログとして脚光をあびるようになってきた」し、「阿部の教養主義が社会が欠落した「人格的」教養主義である」とすると、河合の教養主義はマルクス主義の洗礼を受けているだけに「社会的」教養主義⁸⁷⁾であるという。

河合の業績としてまず挙げられるのは、社会科学古典研究会の立ち上げである⁸⁸⁾。これは河合の属する経済学部のみに限らず、広く全学部に開放し、さらには東京帝大のみに限らず、全学生に、さらにOBにまでも開放した。これは講演会とその後の講師との懇談会から成っており、初年度の1937年には、企画を発表するやいなや申込みが殺到したといわれている⁸⁹⁾。こうして社会科学古典研究会はマルクス主義壊滅のあとの学生たちの理想主義の受け皿になったのである⁹⁰⁾。

しかし、なんといっても河合を有名にしたのは『学生叢書』の刊行である。青木育志は『学生叢書』刊行の目的を「ファシズムの凶暴化、弾圧にあって、マルクス主義は衰退し、何に頼って生きようかと悩む学生に、大正教養主義でもなく、マルクス主義でもなく、理想主義によって生きるよう学生を導く」⁹¹⁾ ことにあったという。『学生叢書』は1936年（昭和11年）12月の『学生と教養』を皮切りに『学生と生活』（1937年7月）『学生と先哲』（1937年12月）『学生と社会』（1938年6月）『学生と読書』（1938年12月）『学生と学園』（1939年6月）『学生と科学』（1939年12月）『学生と歴史』（1940年4月）『学生と日本』（1940年8月）『学生と芸術』（1940年11月）『学生と西洋』（1941年4月）『学生と哲学』（1941年10月）と4年10ヵ月の間に12冊刊行された⁹²⁾。

この『学生叢書』によって安倍能成、倉田百三ら教養主義者たちは甦り、「教養の不評判」をかこっていた阿部次郎は12冊中8冊に登場するなど特に目ざましい復権ぶりを示した⁹³⁾。

河合は昭和8年11月に「五・一五事件の批判」、同年12月に「非常時の実相とその克服」、昭和9年10月に「国家主義の批判」、同月に「国際不安の克服」を書いて軍部や軍部擁護の思想を批判した。このことから学生や知識人たちには「戦闘的自由主義者」として大きく評価された。しかし、昭和10年4月に美濃部達吉の天皇機関説を擁護する「美濃部問題の批判」を発表したあたりから右翼団体が「国体違反」と糾弾し始め、同年5月から高等文官試験委員を突然解任された⁹⁴⁾。この頃から蓑田胸喜⁹⁵⁾を中心とする「原理日本社」などが東京帝大の「赤化」ないし容共教授に対して執拗なバッシングを加えた。貴族院本会議では蓑田と気脈を通じた井田磐楠が河合の著書『ファシズム批判』を糾弾する演説をするなど、河合は次第に追い詰められていく。昭和13年5月陸軍大将で陸軍大臣を経験した皇道派の荒木貞夫が第一次近衛文麿内閣の文部大臣に就任すると、帝大の人事に介入し始めた。こうして「帝大肅正」の名のもと河合は帝大バッシングのスケープ・ゴートにされていく。実質的に軍部を代表する荒木文部大臣の介入から「大学の自治」を守ろうとして、東京帝大総長長与は河合に自著の絶版をさせることで事をおさめようとした。ところが河合がこれを拒絶したため、同年10月5日ついに河合の『社会政策原理』（昭和6年刊）ほか計4冊が「共産主義と何等異ならず」という理由で、さらに反軍的思想の宣伝をしたとして内務省から発禁処分になった⁹⁶⁾。長与総長は同年11月8日辞職した。新たに東京帝大総長になった平賀譲は、秘密裡に動いて各部長から総長一任をとりつけ、昭和14年1月25日河合に辞職勧告する。（この時革新派の土方成美も辞職勧告された）しかし、河合がこれを拒否したため、平賀は文部大臣に対して文官分限令によって河合を休職処分にする上申を行った。その理由は「学説

表現の缺格」であった。同月31日に文官高等分限委員会が開かれ、原案通り河合の休職処分が決定された。その日の午後院内閣議で承認され午後2時半には休職が発令された⁹⁷⁾。いわゆる「平賀肅学」である。このようにして河合は大学を追われた。その後2月末には起訴され、東京地方裁判所で予審判事の取り調べを受けている。

河合が大学を去るにあたって愛する学生に訣別の辞を述べるができなかったことを心残りに思っていることを察知した、河合の門下生で日本評論社の社員美作太郎が「思想界の混迷に当惑している学生層にむかって適切有力な指針をあたへる必要を痛感し、……その仕事をなすべく熱心に勧説した」ところ、河合も同意して箱根の旅宿（俵石閣）に籠り、26日間を費やして完成させたのが『学生に与う』である。この本は昭和15年6月15日日本評論社から出版され、異常な売れ行きを示したという⁹⁸⁾。『学生叢書』もよく売れた。これは、河合栄治郎という思想家の生き方に学生たちが共鳴したということである。二・二六事件を批判し、それがために一部著書が発禁とされ、東京帝大から追放されても、転向せず、反軍部の姿勢を崩さない不撓不屈の、真の、思想家らしい思想家の、河合を支持したのである。自らなしえないことをなす河合に自らの思いを託したのである。『学生叢書』を購入することで、河合を支持し、軍部ファシストに抗議したのであった⁹⁹⁾。

5. 教養主義の復活（第2次世界大戦後）

昭和20年8月15日日本の敗戦後すぐに教養主義とマルクス主義が復活した。竹内洋は「教養主義もマルクス主義も軍国主義の中で弾圧された。一方で、軍国主義による破局への道があった。旧制高校をはじめとする高等教育文化の解体や教養主義の衰微と軍国主義の昂進は共変関係にあった。共変関係はしばしば因果関係に読み替えられやすい。高等教育文化の解体や教養主義やマルクス主義が抑圧されたがゆえにあの戦争があったのだ。教養主義やマルクス主義の復活こそ軍国主義にならないためのものである、と。高等教育や教養主義は、殉教者効果をもち、リバイバルに威光が増した」¹⁰⁰⁾ という。

一方、筒井清忠は、戦争末期と敗戦後を比べても、旧制高校生の読書内容はほとんど変化していないことを指摘する。戦後には『唯物論全書』が現われ、マルクス主義の傾向のものが確かに復活してきたが、大勢は教養主義の書物であった。倉田百三の『愛と認識の出発』、阿部次郎の『三太郎の日記』、西田幾多郎の『善の研究』、和辻哲郎の『古寺巡礼』などは、戦中、戦後を問わずよく読まれていたことが、いくつかの読書調査で確認されている¹⁰¹⁾。いやそれどころか、学生文化としての教養主義は、敗戦直後、戦前にまさるとも劣らない隆盛ぶりを見せたのである。東京をはじめ大都市は焦土化し、学生生活は困窮を極めたが、学生たちは神田の古本屋で戦前の教養書や思想書を探し回った。新しい本が出版されることがわかると、わざわざ上京して徹夜の行列をつくった。河合栄治郎の著作や『西田幾多郎全集』はこうして求められ、むさぼるように読まれたという¹⁰²⁾。

角川書店は昭和20年に創業されると、阿部次郎の著作集や同訳の『ギルヘルム・マイスター遍歴時代』、倉田百三の『愛と認識との出発』『出家とその弟子』などを再刊した¹⁰³⁾。さらに、『学生と教養』や『教養のための読書』といった書物は昭和20～30年代を通して出版され続けたし、

河合編の『学生と読書』は昭和25年に大河内一男・清水幾多郎編『学生と読書』（日本評論社）として再刊され、読まれ続けた。また「現代教養文庫」も創刊されている¹⁰⁴⁾。

しかし、敗戦後日本において旧制高校的教養主義を代表する人物といえば、丸山眞男以外にはいない。

昭和21年、当時東京帝国大学法学部助教授だった丸山が、雑誌『世界』（昭和21年5月号）に論文「超国家主義の論理と心理」を発表した。論文掲載後、ただちに『朝日新聞』が激賞したことによって、賞賛の連鎖反応が起きた。これによって丸山は論壇の寵児になっていく¹⁰⁵⁾。その後講演や論文を収めた『現代政治の思想と行動』が（1956年12月に〔上〕、1957年3月に〔下〕）未来社から刊行されたが、これは大学生のバイブルとなった¹⁰⁶⁾。

丸山が戦後多くの読者に歓迎された理由を水谷三公は「敗戦後の日本人の圧倒的多数が抱いた疑問、つまりなぜ日本はあのように無謀な戦争にのめりこんでしまったのか、原因はどこにあり、同じ誤りを繰り返さないためにはどうすればよいのかという疑問に、斬新で、腑に落ちる説明を与えた」¹⁰⁷⁾ からだという。さらに、丸山があれほど傑出した存在になり、広く読者を引きつけた理由として、「ドイツ観念論やマルクス主義から得られた洞察や論理構成を、英米流の経験主義的政治学によって吟味し、洗練した」¹⁰⁸⁾ し、「アメリカと占領軍に迎合し、軽薄で即物的なアメリカご信心に走る戦後日本の風潮」を排し、「アメリカニズムとは一線を画す西欧、とりわけドイツ観念論・マルクス主義思想とイギリスの社会民主主義の言葉によって、アメリカを相対化する道をも示した」¹⁰⁹⁾ からだとする。

丸山は「ある自由主義者への手紙」（『世界』（1950年9月号））の中で、共産主義にシンパシーをもつものが自由主義者だと言明するなど、一時期マルクス主義に著しく接近した。竹内はこれを説明して「旧制高校的エリート文化が軍国主義に抗しえなかったという弱さや罪責感を、マルクス主義に近づくことによって埋めあわせることができた。またマルクス主義のヴ・ナロード的要素によって旧制高校的エリートイズムを中和することができた」¹¹⁰⁾ と述べている。これに対して、水谷は1958年での座談会での丸山の発言「ぼくはこれまでいっぺんもマルクス主義者になったことないし、一番接近したときでも、どうしても全面的に同感できなかった」を引用しながら、丸山を「反・反共主義」者と位置づける。そして「丸山は反体制気分に傾きやすい青年や知識人に、共産党・共産主義に代わるもう一つの「進歩」と社会改革の可能性を鮮やかに示した」¹¹¹⁾ と主張する。

丸山の言説に対してはもちろん賞賛だけではなく多くの批判もある。たとえば元慶應義塾大学教授中村勝範のコメントは「丸山政治学は思想的に日本人を混乱させた元凶でした。過去の分析も戦後の状況判断も完全に誤っていた」¹¹²⁾ と辛辣である。

6. 教養主義の終焉

戦後日本を実質的に支配したGHQは、「民主化」の一環として教育改革も行った。こうして制度的にはアメリカ流のいわゆる6・3・3制が導入された。これにともない、旧制高校は廃止され、新制大学（4年制）の最初の2年間に押し込まれた。これが教養学部ないし教養部となって、専門的な学問をする前の教養教育を担うことになった。戦前「教養主義」の担い手の中心であっ

た旧制高校が３年制であったのに対して新制大学の教養部では２年であるため、教養教育の環境は悪化したという見方もあるようであるが、実際には、「教養主義」は戦前にまさるとも劣らない隆盛ぶりを見せたのである¹¹³⁾。こうした状況は1940年代、50年代を通して見られたが、1960年代後半になるとはっきり変化が出てきた¹¹⁴⁾。すなわち「教養主義」の衰退である。

「教養主義」衰退には２つの要因が指摘される。まず１つ目は、大学を含む高等教育就学率の激増である。文部省が作成した「高等教育就学率」の統計によれば、高等教育就学率は明治末期に１パーセント、大正中期に1.6パーセント、昭和15年に3.7パーセント、昭和35年（1960年）でも10.2パーセントであった。ところが５年後の1965年には15.2パーセントに達した¹¹⁵⁾。アメリカの教育社会学者マーチン・トロウによれば、高等教育への進学率が15パーセントまでがエリート段階で、15パーセントを超えるとマス段階に入るといわれる¹¹⁶⁾。そうすると大学はエリート性を失い、大衆化するということになる。日本においては、この現象が1970年から75年にかけて顕著に見られる。この５年間で高等教育就学率は18.9パーセントから32.4パーセントへと一挙に13.5ポイントも跳ね上がっている。この５年間は過去100年間で高等教育就学率がもっとも伸びた時期である¹¹⁷⁾。筒井や竹内は、この時期と「教養主義」の衰退の時期が符合するというのである。

高等教育就学率が10パーセント以下であった1950年代後半までの大学生は齋藤孝の言葉を借りれば、それなりに「リスペクト」¹¹⁸⁾されていたし、地方の田舎から東大に入ろうものなら「郷土の誇り」といわれた。企業に入っても、大学卒業者は「大学出」として幹部候補要員として大切に育てられ、大過なくすごせば、それなりの地位と収入を得ることができた。

東大特に法学部を出て官僚になった人々も懸命に働いた。中でも大蔵省（現財務省）や通商産業省（現経済産業省）の激務は有名で、夜通し明かりが消えないことがしばしば目撃された。通産省では「通商産業省ではなくて通常残業省」だとやや自嘲気味に、しかし誇らし気に語られていた。もちろん彼らに立身出世欲はあっただろうし、同期の連中との激しい競争を勝ち抜こうと努力したことは事実であっても、やはり彼らには心のどこかに「国のために」という意識はあったと考えられる。それはまさにエリートだからこそ負うべき義務、つまり「ノブレス・オブリージュ」の感覚があったからだろう。これが当時「日本の官僚は世界一優秀」といわれた理由であろう。

しかし、大学生の数が増大すれば、「大学出」のありがたみは消えうせる。たとえば、平成16年の東大入学者は3,104人であったという。これでは東大生を見る周囲の目も、東大生自身もエリートと認識するのはむづかしい。マスプロのエリートなどは言葉の矛盾である¹¹⁹⁾。なぜならエリート（*élite*）はフランス語の*élire*（選ぶ）からできた言葉で、「選り抜きの精鋭」を意味するからである。

一方、日本の企業も1970年代から大卒の大量採用をするようになった。1971年には大卒を900人採用する企業が現れた。彼らはもはや幹部候補生ではなく、単なるサラリーマン予備軍であった¹²⁰⁾。

これでは大学の「教養知」や「専門知」に対する「リスペクト」が消えうせるのも無理はない。「教養主義」衰退のもう一つの要因は、日本が豊になったことである。1960年代から70年代にかけての高度経済成長によって、日本は国内総生産でアメリカに次いで世界第２位になった。この過程で日本社会の構造にも大きな変化が見られた。たとえば、農林漁業人口は1930年に50パーセ

ント、55年に41パーセント、65年に25パーセント、75年には14パーセントになった。この間ホワイトカラーと販売・サービス部門に就く人が急増している。つまり「貧しく寂しい農村」はほとんど消滅し、農村にも都会にも耐久消費財や自動車がほぼ同じように普及した。要するに日本全体が豊かになったのである。こうなると「教養主義」を支えていた文化的無意識である刻苦勉勵的エートスは崩壊する¹²¹⁾。

こうした「豊かな大衆消費社会」の出現は、学生文化にも大きな影響を与えた。それまでの世代が持っていた「修養主義」的考え方が薄れ、エンターテインメントが中心になっていく。つまり、人生や世界観についての「難しい書物」は敬遠され、スキーやマリンスポーツ、ロック・ミュージックや海外旅行などが人気となった。こうしたいわば「反知性主義」的な雰囲気は大学全体を覆い、学問愛好的態度や人生観や世界観を語ることは「ダサイ」としてむしろ嘲笑の対象になっていったのである¹²²⁾。これを端的に表わす言葉として関西には「いか京」がある。これは「いかにも京大生」の省略形であるが、「お勉強家で、話題がこむずかしく、つきあいづらい」という意味である¹²³⁾。

「教養主義」衰退の要因をあえてもう一つ付け加えるとすると、海外からの影響である。これは岩木秀夫の指摘するところであるが、1970年代後半から80年代にかけて、日本経済は「一人勝ち」状態になったが、対日巨額の貿易赤字を計上し続けたアメリカは、猛烈な「日本バッシング」を開始した。つまり内需拡大とアメリカ製品に対する日本市場の「門戸開放」要求である。スーパー 301条を振りかざし、報復をちらつかせながら、内政干渉まがいの「構造改革」を迫るアメリカの圧力に屈する形で、85年の「プラザ合意」86年の「前川レポート」に現れたように、時の中曽根政権は黒字減らしのための内需拡大路線にかじを切った¹²⁴⁾。内需拡大とはつまるところ、景気刺激による消費拡大である。（なぜなら消費はGDPの6割以上を占めるから）「とにかく消費」は政治および産業界のトップ層のコンセンサスになると連日マスコミで報道され、国民の意識も変わっていった。ここにいたって日本人の持っていた「教養主義」的精神の最後の砦も崩れ去ったのである。

こうした日本人の心の変化に拍車をかけたのがフランスのクレソン首相（在任1991～92年）の「日本人は黄色いアリ」「何度殺しても出てくる」発言である。日本人の「エコノミック・アニマル」振りを揶揄するこれらの言葉これ自体は人種の偏見を含んだ陰險なものでどうい容認できないが、日本人の心に少なからぬ影響を与えたことも間違いない。

おわりに

戦後の高度経済成長は日本を豊かにし、村上泰亮のいう「新中間大衆社会」を出現させた。つまり日本人の9割が自分は中流だと思いう「一億総中流化社会」である¹²⁵⁾。こうした社会では「教養」は何の役にも立たないものとして軽視される。大学でも「一般教養科目」は「パンキョウ」と蔑まれるようになった。

「バブル」を経験した日本人はますますこの傾向を強め、村上陽一郎のいう「規矩」や「矜持」と「ディーセンシー」（品位）¹²⁶⁾を失って、レジャーやグルメなど目先の娯楽や金儲けに走った。

そしてついには、人間の退化と矮小化が進み、ニーチェのいう「畜群」(Herde)¹²⁷⁾ になってしまったのではないか。

また、学校教育現場でも大きな変化が起きた。日本経済の一人勝ちによって海外からジャパン・バッシングを受け、日本は内需拡大、「とにかく消費」に傾いていったことはすでに述べたが、この時期、これと並行するように行われたのが、中曽根首相直属の「臨時教育審議会」(1984年～87年)であった。この臨教審の出した方向性、すなわち詰め込みによる偏差値序列教育を止め、子供の生活や意欲・関心を伸ばす教育、はその後いわゆる「ゆとり教育」へと受け継がれていく¹²⁸⁾。1991年には、指導要録の改訂が行われ、「観点別絶対評価」が導入された。これによって、たとえば小学校低学年の「評定」欄は廃止され、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の観点別に学習状況をA(十分満足できる)B(おおむね満足できる)C(努力を要する)の絶対評価とした¹²⁹⁾。これでは、競争の排除であり、優等生やエリートの排除である。もちろん「おちこぼれ」の子供を救うことは大切であるが、これでは勉強しようとする意欲や知識に対するリスペクトが無くなってしまふ。今、この当時、小・中学生だった人たちが次々に大人になっているが、彼らに「努力」や「向上心」「克己心」あるいは「教養」に対するリスペクトが希薄であっても驚きではない。

目を転じれば、日本人の誇りであった経済の強さはすっかり地に堕ち、日本は低成長と巨額の財政赤字に喘いでいる。また外交面でも領土問題をはじめ、TPP交渉など困難な課題が山積している。こうした中、出てくるのがしっかりした「リーダー」待望論である。その場合リーダーに必要とされるのが「教養」である¹³⁰⁾。しかし、「教養」は崩壊したままである。今こそ「教養」の立て直しと復権が必要である。

本稿では、日本において「教養」がどのように受け入れられ、日本人とどのように関わってきたのか、明治・大正期から現在まで「教養主義」をキーワードにしながら検討した。

なお、「教養」をどのように立て直し、復権させるのか。これについては、次稿で論じることとしたい。

注

- 1) 桑子敏雄、上田紀行、池上彰による特別講座：「頭がいいけど『世間』に弱い」理系の大学生、2012年 村瀬裕也：教養教育復権のために、香川大学学術情報リポジトリ、pp.13～14
筒井清忠：大衆文化と新しい教養～対話者・梅原猛（筒井清忠著新しい教養を求めて、中央公論新社、2000年所収）pp.173～175
- 2) 立花隆：知的亡国論（東大生はバカになったか、文芸春秋、2004年所収）pp.37～61
- 3) 2011年1月に設置された東京工業大学のリベラルアーツセンター（2012年4月始動）はその一例である。
- 4) 筒井清忠：日本型「教養」の運命～歴史社会学的考察、岩波書店、1995年、pp.88～89
- 5) 和辻哲郎：すべての芽を培え（和辻哲郎全集第17巻所収、岩波書店、1978年）pp.132～133
- 6) 筒井清忠：前掲書 pp.7～13
- 7) 同上 p.10
- 8) 同上 p.4

- 9) 同上 pp.4～5
- 10) 同上 pp.14～18
- 11) 新渡戸稲造：修養、たちばな出版、2012年、pp.71～72
- 12) 田中文憲：ドイツの教養、奈良大学紀要 第41号、2013年、pp.26～27
- 13) 新渡戸稲造：前掲書 p.37
- 14) 同上 pp.73～405
- 15) 筒井清忠：前掲書 p.32
- 16) 清水真木：これが「教養」だ、新潮社、2010年、p.103
- 17) 筒井清忠：前掲書 p.30
- 18) 同上 p.61
- 19) 竹内 洋：教養主義の没落、中央公論新社、2004年、p.40
- 20) 三木 清：読書遍歴（三木清全集第1巻、岩波書店、1966年所収）、p.387
- 21) 筒井清忠：前掲書 p.61
- 22) 同上 p.87
- 23) ケーベル：ケーベル博士随筆集（久保勉訳編）、岩波書店、1973年、p.193
- 24) 同上 p.194
- 25) 山下大吾：ケーベル先生と古典（第21回ラテン語の夕べ）2011年、p.6
- 26) 西田幾多郎：ケーベル先生の追懐（西田幾多郎全集第13巻、岩波書店、1966年所収）pp.176～177
- 27) 三木 清：哲学はどう学んでゆくか（三木清全集第1巻、岩波書店、1966年所収）pp.474～475
- 28) 夏目漱石：ケーベル先生（漱石全集第8巻、岩波書店、1966年所収）p.372
- 29) 筒井清忠：前掲書 pp.49～51
- 30) 唐木順三：新版現代史への試み、筑摩書房、1967年
- 31) 同上 pp.35～36
- 32) 同上 p.236
- 33) 同上 p.33
- 34) 同上 p.236
- 35) 三浦雅士：青春の終焉、講談社、2012年、p.376
- 36) 同上 p.378
- 37) 筒井清忠：前掲書 pp.36～37
- 38) 小室弘毅：阿部次郎『三太郎の日記』における教養の問題—唐木順三の教養派批判の再検討—、東京大学大学院教育学研究科紀要第40巻、2000年、p.25
- 39) 瀬川 大：「修養」研究の現在、東京大学大学院教育学研究科 教育学教室研究室紀要 第31号 2005年、p.48
- 40) 阿部次郎：合本 三太郎の日記、角川書店、1986年、p.36
- 41) 同上 p.322
- 42) 竹内 洋：前掲書 p.171
- 43) 阿部次郎：前掲書 p.345
- 44) 荻部 直：光の領国 和辻哲郎、岩波書店、2010年、p.171
- 45) 加藤周一：解説～作品・方法・感受性および時代（和辻哲郎著 日本精神史研究、岩波書店、1995年所収）p.393
- 46) 坂部 恵：和辻哲郎～異文化共生の形、岩波書店、2000年、p.167
- 47) 荻部 直：前掲書 p.170～171

- 48) 三木 清：教養論（三木清全集第13巻、岩波書店、1967年所収）p.319
- 49) 唐木順三：前掲書 p.132
- 50) 粕谷一希も「西田幾多郎は自己流、我流の思索者であったが、天才的な直観の持ち主であり、（中略）この直感力の動物的強さを感じさせる、（粕谷一希著反時代的思索者～唐木順三とその周辺、藤原書店、2005年、p.277）と述べている。
- 51) 海老坂武：加藤周一、岩波書店、2013年、pp.109～128
- 52) 粕谷一希は「和辻哲郎の倫理学体系と九鬼周造の偶然性の哲学は、幾重にも貴重な体系であり、20世紀の近代日本が世界に誇ってよい哲学であると思う」（粕谷一希：前掲書 p.283）と述べている。
- 53) 三木 清：知識階級と政治（三木清全集第15巻、岩波書店、1967年所収）p.118
- 54) 三木 清：読書遍歴（三木清全集第1巻、岩波書店、1966年所収）pp.389～390
- 55) 三木 清：教養論（三木清全集第13巻 所収）p.324
- 56) 三木 清：知識階級と政治（前掲書 所収）pp.123～124
- 57) 荻部 直：「政治的教養」をめぐる（筒井清忠編著 政治的リーダーと文化、千倉書房、2011年 所収）p.132
- 58) 原 宏之：世直し教養論：筑摩書房、2010年、pp.85～86
- 59) 三木 清：知識階級と政治（三木清全集 第15巻 所収）pp.125～126
- 60) 田中文憲：前掲論文 p.19
- 61) 三木 清：哲学の復興（三木清全集第13巻 所収）pp.300～301
- 62) 宮川 透：西田・三木・戸坂の哲学、講談社、1967年 pp.107～108
- 63) 同上 p.114
- 64) 同上 p.115
- 65) 原 宏之：前掲書 p.86
- 66) 三木は共產主義者、社会主義者だったことはなく、むしろいわゆる正統派マルクス主義者からは批判され続け、一時参加した革命的文化運動からも早い時期に追放されていたとする見方もある。（赤松常弘著 三木清～哲学的思索の軌跡、ミネルヴァ書房、1994年、p.ii）
- 67) オルテガ・イ・ガセット：大衆の反逆（神吉敬三訳）、筑摩書房、1912年
- 68) 色摩力夫：オルテガ～現代文明論の先駆者、中央公論社、1988年、pp.168～169
- 69) 筒井清忠：前掲書 pp.94～95
- 70) 大和田寛：1920年代におけるマルクス主義の受容と社会科学文献、大原社会問題研究所雑誌、No.617、2010年、p.55
- 71) 竹内 洋：大学という病（前掲）p.33
- 72) ボボルキンというロシアの無名作家の造語インテリゲンチヤの短縮形で、ロシア革命の成功とソビエト連邦の誕生とともに脚光を浴び、わが国にも輸入された（竹内洋著：大学という病（前掲）p.34）
- 73) 京都帝大に「労学会」、早稲田大学に「民人同盟会」や「建設者同盟」、法政大学に「扶信会」ができた（竹内洋著 大学という病（前掲）p.35）大正11年には一高に「社会思想研究会」ができ、三高、五高、七高、浦和高が続いた。大正12年には二高、四高、六高、新潟高、水戸高、弘前高にも「社研」ができた。（筒井清忠：前掲書 pp.96～97）
- 74) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲）pp.40～41
- 75) 筒井清忠：前掲書 pp.97～99
- 76) 同上 p.99
- 77) 竹内 洋：大学という病（前掲）p.37
- 78) 同上 pp.39～40

- 79) 同上 p.40
- 80) 藤本達彦：治安維持法 pp.1～3
- 81) 筒井清忠：前掲書 pp.96～97
- 82) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲）p.56
- 83) 竹内 洋：大学という病（前掲）pp.156～158
- 84) 青木育志：教養主義者 河合榮治郎、春風社、2012年、p.15
- 85) 河合榮治郎：学生に与う（河合榮治郎全集第14巻、社会思想社、1967年所収）p.15
- 86) 筒井清忠：前掲書 pp.72～73
- 87) 竹内 洋：大学という病（前掲）p.170
- 88) 竹内 洋：同上 pp.172～173
- 89) 青木育志：前掲書 pp.113～115
- 90) 竹内 洋：大学という病（前掲）p.173
- 91) 青木育志：前掲書 p.144
- 92) 同上 pp.146～147
- 93) 筒井清忠：前掲書 p.101
- 94) 竹内 洋：大学という病（前掲）pp.168～169
- 95) 1894年生まれの民間右翼思想家。五高、東京帝大を経て、「原理日本」を主宰。帝大バッシングを主導した。1946年自殺（竹内洋著 帝大肅正運動の誕生・猛攻・蹉跌〔竹内洋・佐藤卓己編：日本主義的教養の時代、柏書房、2006年所収〕および竹内洋著丸山眞男の時代、中央公論新社、2005年 pp.42～110に詳述されている）
- 96) 竹内 洋：大学という病（前掲）pp.223～233
- 97) 同上 pp.234～238
- 98) 美作太郎：初版『学生に与う』が世に出るまで、河合榮治郎全集、月報1第14巻、1967年、p.1
猪木正道：解説 河合榮治郎全集第14巻（前掲）pp.349～355
- 99) 青木育志：前掲書 p.155
- 100) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲）p.198
- 101) 筒井清忠：前掲書 pp.67～71
- 102) 竹内 洋：学歴貴族の栄光と挫折、中央公論新社、1999年、p.294
- 103) 同上 p.295
- 104) 筒井清忠：前掲書 p.107
- 105) 竹内 洋：学歴貴族の栄光と挫折（前掲）pp.296～297
- 106) 同上 p.302
竹内 洋：丸山眞男の時代、中央公論新社、2005年、p.24
- 107) 水谷三公：丸山眞男～ある時代の肖像、筑摩書房、2004年、p.70
- 108) 同上 p.70
- 109) 同上 pp.75～76
- 110) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲）pp.198～199
- 111) 水谷三公：前掲書 p.84、p.103、p.209
- 112) 竹内 洋：丸山眞男の時代（前掲）p.9
- 113) 筒井清忠：前掲書 pp.106～107
- 114) 同上 pp.107～108
竹内 洋：教養主義の没落（前掲）p.206

- 115) 筒井清忠：前掲書 p.110
- 116) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲） p.206
- 117) 筒井清忠：前掲書 p.110
- 118) 齋藤 孝：なぜ日本人は学ばなくなったのか、講談社、2008年、pp.25～27
- 119) 水木 楊：東大法学部、新潮社、2006年、pp.161～162
- 120) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲） pp.207～208
- 121) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲） pp.218～219
- 122) 筒井清忠：前掲書 pp.112～113
- 123) 高田里恵子：グロテスクな教養、筑摩書房、2005年、p.188
- 124) 岩木秀夫：ゆとり教育から個性浪費社会へ、筑摩書房、2004年、pp.142～144
- 125) 竹内 洋：教養主義の没落（前掲） pp.233～235
- 126) 村上陽一郎：あらためて教養とは、新潮社、2009年
- 127) ニーチェ：善悪の彼岸（木場深定訳）、岩波書店、2012年、p.184
- 128) 岩木秀夫：前掲書 pp.110～111
- 129) 同上 pp.115～116
- 130) 立花 隆：前掲書 pp.148～149、p.169

Summary

This paper analyzes how Japanese people accepted the concept of 'culture' introduced into Japan during the Taisho era, based on the keyword 'culturalism'. This study reveals that the concept of shuyo or self-improvement already existed in the Edo era and was carried over to the Meiji era and then replaced by kyoyo or 'culture' during the Taisho era.

Japanese 'culture', which was influenced by German Bildung, was accepted mainly by high school students in the prewar days. At the same time, philosophers such as Jiro Abe and Tetsuro Watsuji were very popular among students.

When Marxism became powerful, 'culturalism' declined. But when Marxism was oppressed by the military authorities, 'culturalism' was again restored. This was the so-called 'Showa culturalism'. The noted philosopher, sociologist and economist Eijiro Kawai was quite active at that time and became popular among students. When Professor Kawai, a radical liberalist, was expelled from Tokyo University by the military authorities, 'Showa culturalism' died.

After World War II, 'culturalism' was recovered immediately because the majority of students were still 'culturalist' and continued reading books on philosophy, the classics, Bildungsromans and so on. 'Culturalism' flourished even more than in the prewar days. 'Culturalism' however, declined after Japanese people began to enjoy a high rate of economic growth through the 1960's and 70's. The Japanese became rich and about half of all young people attended universities. Most Japanese felt that they belonged to the middle class. They began to shun 'culture' and were inclined to seek materialistic pleasures.

'Culturalism' finally collapsed and died after the Japanese accepted requests from overseas, especially from the U.S.A., to stimulate the economy and spend more money in Japan, which resulted in a bubble economy. 'Culturalism' is still dead in Japan. It should be restored once again.

[Key words] self-discipline, Bildung, culturalism